

『恋の調教、おまかせください♥』

著：森本あき

ill：旭炬

「がんばらなくていいんだよ。風音くん、真面目でいい子だね。でも、ちょっと力を抜いてごらん」

空也は風音の両肩を、軽く揉(も)んだ。そのあとで、肩から首を何度か撫(な)でる。そうされると、手の熱が伝わって、気持ちいい。

「うん、そんな感じ。ぼけっとしてて」

「え、俺、ぼけっとなんて…」

できるわけがない。結構、必死なんだから。

「しゃべらないの」

空也の言葉とほぼ同時に、唇が重ねられた。ただ触れるだけじゃなくて、軽くついばまれる。ちゅっ、ちゅっ、と音をさせながら何度も繰り返されているうちに、風音の唇が自然とそれに応えるように開いた。

それでいいんだよ、というかのように、ぽん、ぽん、と肩をたたかれて、風音はほっとする。

空也のキスは、だんだん激しくなった。まるで嚙(か)みつくかのように、右から、左から、深い角度で吸い上げられる。風音はなんとかついていこうとするけれど、途中でどうしていいかわからなくなって。押し込まれるようにされて、おなじように押そうとしたら、張り切りすぎたのか、歯が、ガチッ、とすごい音を立てて当たった。あまりの痛さに、風音は空也を思い切り突き飛ばす。

「あ…」

はっと我に返って、風音は青くなった。

「ご、ごめんなさい！ 俺、そんなつもりじゃ…」

「いやー、痛かったね」

空也はくすくすと笑っている。怒られるとばかり思っていた風音は、きょとん、と空也を見た。

「歯が当たるって聞いたことはあっても、実際にやったことはないから。貴重な経験だ。あのね、風音くん」

「はい…」

風音はうなだれる。説教は、どうやらこれからだ。

「されるがままでいいんだよ。もうちょっと慣れたら、自分から吸いついたり、唇を押し戻したり、自分から舌を入れられるようになるから。いまはまだ、キスってこんなものだよ、って教えてる段階」

「すみません…」

「怒ってないよ」

空也が、よしよし、と風音の頭を撫でた。

「初めてだから、緊張するし、わからないことだらけだし、パニックになるのはしょうがない。痛かったもんねえ。そりゃ、突き飛ばしたいよね」

いやみなんだろうか、とちらり、と空也をうかがうと、やさしい笑顔にぶつかる。それだけで、なんだか涙が出そうで困った。

どうやら、自分で思っている以上に神経が張りつめているらしい。

「本当に怒ってないですか？」

「うん、怒ってないし、これからも怒らない。突き飛ばされたり、蹴(け)られたり、殴(なぐ)られたり、はしょっちゅうだからね」

「ええっ！」

風音は目を丸くする。

「そんなに危険なレッスンなんですか!？」

「ちがう、ちがう」

空也は苦笑した。

「セックスって、慣れてない人からすれば、ええ、こんなことを!? っていうような行為をしたり、とんでもない格好をさせられたりするから。覚悟していても、つい手や足が出ることもあるんだよ。さっきの風音くんみたいに」

「ああ…」

それなら理解できる。風音だって、突き飛ばそうと思ってやったわけじゃなくて、自然に手が動いていた。

「大変ですね」

「最初はね。でも、教えていくうちに、ああ、ここでこうなるんだろうな、って予測はつくから。よけるのはうまくなったよ。だから、風音くんも遠慮せずに、どんどん蹴ったり殴ったりしていいよ」

「しませんよ！」

風音はぶんぶんと首を横に振った。

「俺、性の達人になりたいんですから！」

そして、バージンだとほくそ笑(え)んでいるだろう飼い主を、心底びっくりさせてやる!

「じゃあ、その第一歩、キスのレッスン、つづけていい？」

「いつでもこいです！」

ドン、と胸をたたいたら、空也がぷっと吹き出す。

「そういう色気のないことはしないの。相手を欲情させるのも、性の達人の役目だよ」なるほど。それもそうだ。

「わかりました」

風音は、うん、とうなずいた。やっぱり、ちゃんと教えてくれるほうが理解しやすい。とはいえ、全部説明されたら、頭がパンクするだろう。なかなかむずかしい。

「欲情させてみて」

空也はいたずらっぽく言う。風音には無理だろう、とでも思っているのだろうか。なんだか悔しい。

風音は空也に一步近づいて、肩に手をかけた。

あ、背が高いんだな。

まったく関係ないのに、そんなことを思う。風音だってそれほど低くはないけれど、それでも、伸び上がった感じになるのだ。

踵(かかと)をあげて、唇を寄せて。

「キスして…」

せいいっぱいの甘い声でささやいた。こんな場面を映画で見たことがあるから、それをやってみただけだけど、どうだろう。

「ちょっとごちないのをのぞけば、合格。自分から誘うのって、恥ずかしいから最初はできないと思ったんだけど。なかなか大(だい)胆(たん)なところもあるね。これからが楽しみだ」

そう言われたら、とたんに恥ずかしくなってくる。慌てて手ははずそうとしたのに、がしっ、とそれをつかまれて。そのままキスをされた。

今度は最初から深いキス。唇全体を包むように吸われて、風音は知らず知らずのうちに唇を大きく開いていた。

するり、と何かが入ってきて、そのやわらかいものが風音の舌を探(さぐ)り当てる。舌だ、と気づいたのは、しばらく絡(から)めたあと。舌先をくすぐられて、風音の体が、ぞくり、と震えた。

…え、なに、これ。

ぞわぞわ、ぞくぞく。首筋から背中にそって、そんな感覚が駆(か)け下りていく。

上(うわ)顎(あご)、歯の裏、歯と唇の間など、口(こう)腔(こう)内をぞんぶんにまさぐられて。空也の舌が離れた瞬間、がくん、と腰が落ちそうになった。

「これがキス」

息がかかるぐらいの距離で、まるで唇でくすぐるかのようにつぶやく。ぞわぞわは、まだ治まらない。

「いまからいっぱいしてあげるね」

本文 p43～50 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>